

April 22nd 2008 Featured Speakers

日本の地域社会における対外国人意識の新しい形態

北海道稚内市と富山県射水市を事例として

Speaker

小林真生, Graduate School of Asia Pacific Studies

私が育ったのは1980年代後半にアジアからの労働者を受け入れ、1990年代以後は日系南米人が多く集住するようになった群馬県太田市である。その地域では来日する外国人が変わっても、彼らに対する「まなざし」に変化はなく、彼らに対する偏見も強く、地域社会と外国人の関係は良好ではなかった。それと似た状況が日本各地に広がっていることを知り、「日本の地域社会における対外国人意識」を研究の対象とし、意識改善に向けた方法を探るようになった。

Abstract

従来、日本に滞在する外国人は 旧植民地時代に旧植民地より来日した在日コリアンなどの「オールドタイマー」と 人手不足に悩む地方の工業都市で就労するために来日した日系南米人を中心とする「ニューカマー」に大きくは分類されてきた。

しかし、現在は新しい流れとして、基幹産業といえるほどの産業が無い地域に多様な外国人が増加する流れが生まれている。これは、外国人に関する情報(例えば、彼らの地域への貢献など)に日本人住民が触れる機会の少ない状況が生まれていることを意味している。また、日系南米人の場合も同様であるが、日本の地域社会においては相互の交流が少ないままに、意識が悪化している状況があり、外国人に関する情報がより少なくなることは、その意識を一層悪化させる危険がある。そこで、ロシア人船員が多く上陸し、中国人研修生が多く生活する北海道稚内市と、ロシア人船員が多く上陸し、彼らにパキスタン人が中古車を販売し(その店舗数は260軒程度)、街中には日系ブラジル人と中国人研修生が多く生活する富山県射水市を対象にしたアンケート調査、及びその後のインタビュー調査の結果から日本の地域社会の現状を捉え、対外国人意識改善に向けた方策を提起したい。

Commentator

鈴木江理子, 立教大学兼任講師、一橋大大学院社会学研究科博士後期課程に在籍中

立教大学兼任講師、一橋大大学院社会学研究科博士後期課程に在籍中(研究テーマは「日本で働く男性長期非正規滞在者」)。日本の外国人政策や国際労働力移動、地域社会の多文化化などについて研究するかたわら、外国人支援の現場でも活動している。主要著書は「多文化化する日本を考える - 国境を越えた人の移動が進展するなかで」(FIF Special Report No.8, 2004)、「多文化パワー」社会 - 多文化共生を超えて」(共編著, 明石書店, 2007)など。



日時 : 2008年 4月 22日(火) 午後 6時~8時

Date : Tuesday April 22 18:00~20:00

会場 : 西早稲田ビル 19号館 710号室

Venue : Sodai-Nishiwaseda Bldg 19 Room 710

主催 / Organized by : WUDSN 協力 / Supported by : GIARI

申込不要、自由入場 / Open to public, Free of charge